



第10年目を迎えて

会長 高橋 秀俊

今年をもってわが情報処理学会は第10年目を迎える。本会は IFIP (国際情報処理連合) に日本を代表する国内団体として、また日本最初の情報処理に関する学会として、1960年に山下英男初代会長らによって創立されたのである。以来、この方面でわが国の唯一の学術団体として、研究調査、研究発表、啓蒙、国際活動等、多方面にわたって斯界に貢献してきた。その間、機関誌「情報処理」は創立以来ずっと隔月刊として、日本における唯一の情報処理に関する論文誌として、また格調の高い啓蒙誌として、重要な機能をはたしてきたことは、とくに事新しくいうまでもない。

ところで、わずか10年とはいえ、この10年は情報処理にとっては長い10年であった。創立当時は、情報処理という言葉自体が全く聞き慣れない言葉で、これを会の名にすることは相当の抵抗があったような次第で、今日の猫も杓子もの情報ブームの時代から見ると今昔の感を禁じ得ない。日本の情報処理工業も、いまや成長産業のトップを進んでいる。しかしながら、本会もそれに比例して隆盛をきわめているかという、残念ながらそうはいえないようである。たとえば、会員数にしても、会の創立1年足らずで1,000名に達したのに、今日、3,514名と、まだ4倍弱である。雑誌の量についても、いまもって創立当時と同じ隔月刊であり、頁数もいくらか増していない。今日の情報産

業の高度成長や、社会の情報化の実状とくらべて、いささかちぐはぐではないだろうか。

このことは、われわれ学会関係者の努力が足りなかったことはもちろんであるが、単に学会だけの問題ではないのはいうまでもない。日本における情報処理の基礎研究があまり活発でないことのあらわれにはかならない。このことは、ごく最近になって、ようやく識者の間にも認識されはじめ、この状況を改善するために、いまや各界が懸命になっているようである。

本会としても、この状況を打開すべく、10周年を機会に積極的な方策を樹てて、わが国の情報処理研究を国際的競争力あるものにする必要がある。その具体策の一つとして、今年から、本誌を月刊とし、年12回発行することになった。さらに、内容を量・質共に一層充実させるために、編集幹事会が鋭意検討中である。

会員数を飛躍的に増すための方策も早急に考えた。会誌の配布を受けることは、本会会員の等しく得る便益の中の最大のものといえるから、会誌の充実はその意味からも重要な一歩であると信ずる。

学会としては、その他にもいくつかの記念事業を計画中で、いずれ、本誌に発表される筈である。私としては、この10周年をもって本会の躍進の年として、日本の情報処理学会が名実共に国際的なものになることを願ってやまない。